

学生が考える臨床実習における「好ましい行動」に関する調査

A study of students' perceptions of “favorable attitudes” toward clinical training

岩瀬弘明 村田 伸 船田雅之 渡邊俊行 原由香利
下平佳代 廣瀬智理 窓場勝之 宮原洋八

HIROAKI IWASE , SHIN MURATA , MASAYUKI FUNATA , TOSHIYUKI WATANABE , YUKARI HARA ,
KAYO SHIMOHIRA , SATORI HIROSE , KATSUYUKI MADOKA , HIROYA MIYABARA

学生が考える臨床実習における「好ましい行動」に関する調査

A study of students' perceptions of "favorable attitudes" toward clinical training

岩瀬 弘明¹⁾ 村田 伸¹⁾ 船田 雅之²⁾ 渡邊 俊行²⁾ 原 由香利²⁾
下平 佳代²⁾ 廣瀬 智理²⁾ 窓場 勝之²⁾ 宮原 洋八³⁾

HIROAKI IWASE¹⁾, SHIN MURATA¹⁾, MASAYUKI FUNATA²⁾, TOSHIYUKI WATANABE²⁾, YUKARI HARA²⁾,
KAYO SHIMOHIRA²⁾, SATORI HIROSE²⁾, KATSUYUKI MADOKA²⁾, HIROYA MIYABARA³⁾

要旨：本研究の目的は、学生が考える臨床実習における「好ましい行動」を明らかにすることである。調査対象は、理学療法士養成校（4年制）に所属する1年生であり、臨床実習での好感がもてる行動についてアンケート調査を行った。学生が考える臨床実習における好感がもてる行動は、挨拶や実習に臨む態度、社会規範に関する項目が上位を占めていた。一方、軽視されている項目は医療の場における健康問題を巡る関係者の交流を表す『ヘルス・コミュニケーション』に関する項目や身だしなみに関する項目であった。これらの知見から、学生は挨拶や態度といった情意領域を重要視している一方で、ヘルス・コミュニケーションや身だしなみについては重要視していない可能性が示された。

キーワード：臨床実習，学生，アンケート調査

Abstract: This study aimed to identify students' perceptions of "favorable attitudes" toward clinical training. We performed a survey to investigate favorable attitudes toward clinical training involving 1st year students of the School of Physical Therapy (4-year course). Items regarding polite greetings, positive attitudes toward the training, and respect for social norms were considered the most favorable attitudes perceived by the students in clinical training. However, those regarding "health communication", which indicates interactions among health care providers about health care issues, and the tidiness of their appearance were disregarded. These findings suggest the possibility that the students put a great emphasis on emotional aspects, such as greetings and attitudes; however, they downplayed health communication and the tidiness of their appearance.

Key words: Clinical training, student, questionnaire survey

I. 緒言

わが国の高齢化率は、1970年に7%（高齢化社会）、1994年に14%（高齢社会）、2007年に21%（超高齢社会）に達し、他の先進諸国に例をみないスピードで高

齢化が進んでいる（平成25年版高齢社会白書2013）。このような急速な高齢化のなかで、社会保障が大きな問題となり、リハビリテーション専門職である理学療法士や作業療法士の養成が急務となった。これに伴い、

受付日：平成25年9月10日、採択日：平成25年11月5日

1) 京都橘大学 健康科学部理学療法学科

Faculty of Health Science, Kyoto Tachibana University

2) 社会福祉法人京都博愛会 京都博愛会病院

Department of Rehabilitation, Kyoto Hakuikai Hospital

3) 西九州大学 リハビリテーション学部

Faculty of Rehabilitation Sciences, Nishikyushu University

養成校開設の規制緩和が行われ、2000年以降に養成校の急増が生じた。なかでも理学療法士養成校は著しく増加し、2000年に118校あった養成校は、2013年に248校まで数を増やしている（日本理学療法士協会 2013 a）。

2012年4月に社団法人日本理学療法士協会に所属する理学療法士（日本理学療法士協会 2013 b）は77,791名（理学療法士国家試験合格者総数の77.4%）であり、そのうち理学療法士作業療法士指導要領（厚生労働省健康政策局1999）において、臨床実習指導者の要件となる「理学療法士免許取得後3年以上の実務経験を有する」を満たすものは59,586名、要件を満たさない3年未満のものが18,205名である。一方、2012年4月における理学療法士養成校の入学定員は13,265名であり、今後も毎年10,000名以上の新人理学療法士が誕生する見込みである。

このように、理学療法士養成校ならびに新人理学療法士の増加が見込まれるなか、理学療法士の若年化と実習指導者不足が進展していることから、今後の臨床実習には指導者の育成も課題の1つとなる。八木ら（1984）は、61施設146名の理学療法士を対象に、臨床実習に関するアンケート調査を行った結果、75.8%が臨床実習に関心があると回答している。また、実習指導に関しては、「自分自身にも刺激となり、勉強になる」という回答が最も多い。しかしながら、一方では「自分の指導に対し実習生が納得しているか不安である」「スーパーバイザーとして実習生の指導に自信がない」といった不安を抱いて指導に望んでいる理学療法士も少なくない。今後、若手の実習指導者が増えていくなかで、学生がどのような態度で臨床実習に望んでいるのかを把握することは、実習指導者にとってよりよい指導を行うための一助になると考える。

岩瀬ら（2013）は、実習指導を経験したことがあるセラピストを対象に、臨床実習における「学生の好感がもてる行動」についてのアンケート用紙を作成し、各項目の重要度について順位付けを行った。その結果、実習指導者は、学生の患者に対する挨拶や態度を重要視しているが、学生の知識や身だしなみ、デイリーノートの記載量は重要視していないことを報告している。

このように、実習指導者からみた学生の好感がもてる行動は明らかにされているが、学生が考える臨床実習で好ましいと思う行動については明らかになっていない。そこで、本研究は学生が考える臨床実習における「好ましい行動」を明らかにし、実習指導者の好感

がもてる行動と、学生が考える好ましい行動との整合性について検討することを目的とした。

Ⅱ．対象と方法

1．対象

A大学の理学療法学科に所属する1年生50名（男性28名、女性22名）であり、調査時期は1年生の後期日程終了後、臨床基礎実習（1週間の見学実習）直前の実習前セミナーの冒頭に行った。また、今回対象とした1年生は、4年制大学の1期生であり、臨床実習の見本となる上級生はいなかった。

なお、倫理的配慮として、対象者には研究の趣旨と内容、得られたデータは研究の目的以外には使用しないこと、および個人情報の漏洩に注意することについて説明し、理解を得た上で協力を求めた。また、研究への参加は自由意志であり、被験者にならなくても不利益にならないことを口頭と書面で説明し、書面で同意を得た後に研究を開始した。

2．方法

アンケート調査は、岩瀬ら（2013）が作成したアンケート用紙を使用した。岩瀬ら（2013）が作成したアンケート用紙は、臨床実習を指導した経験があるセラピスト30名を対象に、指導者からみた学生の好感がもてる行動について回答を求めて148項目に集計したものである。アンケート調査は、各項目ごとに「とてもそう思う」、「まあまあそう思う」、「あまり思わない」、「まったく思わない」の4件法で回答を求めた。得られた回答に対して、便宜的に「とてもそう思う」を3点、「まあまあそう思う」を2点、「あまり思わない」を1点、「まったく思わない」を0点と換算して合計し、その平均点を基に、学生が考える好ましい行動について順位付けを行った。

Ⅲ．結果

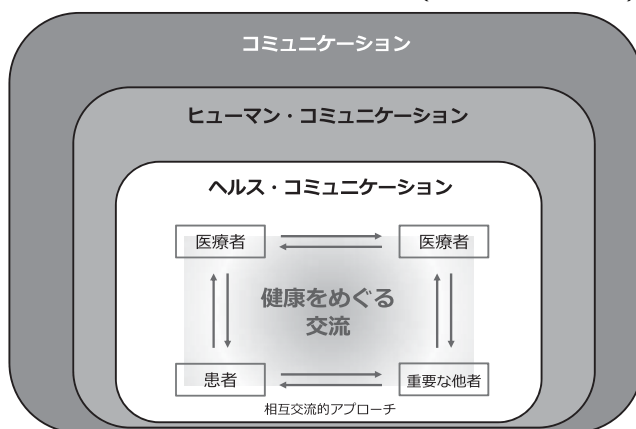
アンケート調査で集約された項目を前述した方法で整理し、学生が考える好ましい行動の重要度を明らかにした（表1）。その結果、最も重要度が高かった項目（1位：3.00点）は「患者にはっきりと挨拶ができる」、「セラピストにはっきりと挨拶ができる」、「患者とコミュニケーションをとる努力をしている」であり、次いで「セラピスト以外の病院職員にはっきりと挨拶ができる」（4位：2.98点）、「セラピストの治療場を熱心に見学している」、「備品を大切に扱う」、「遅刻

表1. 臨床実習学生が考える臨床実習における「好ましい行動」の重要度 (n = 50)

順位	質問内容	平均点
1	患者にはっきりと挨拶ができる	3.0000
1	セラピストにはっきりと挨拶ができる	3.0000
1	患者とコミュニケーションをとる努力をしている	3.0000
4	セラピスト以外の病院職員にはっきりと挨拶ができる	2.9800
4	セラピストの治療場面を熱心に見学している	2.9800
4	備品を大切に扱う	2.9800
4	遅刻をしない	2.9800
4	休む時には連絡をする	2.9800
4	体調管理ができる	2.9800
4	失敗したことに對して謝ることができる	2.9800
11	提出物の期限を守ることができる	2.9600
11	見学中、患者の様子を熱心に観察している	2.9600
11	できばきした行動をとる	2.9600
11	実習終了時、患者にお礼の挨拶が言える	2.9600
11	患者を理解しようと努力している	2.9600
11	患者を第一に考えることができる	2.9600
11	患者に笑顔で接することができる	2.9600
11	指導を素直に聞ける	2.9600
11	セラピストに報告ができる	2.9600
11	セラピストに連絡ができる	2.9600
~~~~~		
126	適切な治療目標を設定できる	2.5400
126	治療の計画を立てることができる	2.5400
126	再評価の計画を立てることができる	2.5400
132	セラピストに自分が興味のあることを伝えることができる	2.5200
132	臨床医学について質問すると正確に答えることができる	2.5200
132	カルテからの情報収集ができる	2.5200
135	症例レポートに論理的な考察が記載されている	2.5000
136	デイリーノートの記載が多い	2.4800
136	セラピスト以外の病院職員と会話する	2.4800
136	セラピスト以外の病院職員に自分の考えを伝えることができる	2.4800
139	患者との医療面接ができる	2.4600
140	治療内容に工夫ができる	2.4400
141	患者と面白い話ができる	2.4200
141	他部門からの情報収集ができる	2.4200
143	文献を積極的に読んでいる	2.3600
144	靴下が白い	2.2400
145	無地の下着を身につけている	2.2200
146	靴下が無地である	2.1800
147	白い下着を身につけている	2.1200
147	体調が悪い時は休むことができる	2.1200

をしない」、「休むときには連絡をする」、「体調管理ができる」、「失敗したことに對して謝ることができる」など、挨拶や実習に臨む態度、社会規範に関する項目が上位を占めた。一方、下位項目は「患者との医療面接ができる」(139位: 2.46点)、「他部門からの情報収集ができる」(141位: 2.42点)といった医療の場における健康問題を巡る関係者の交流を表すヘルス・コミュニケーション(ピーター・G・ノートハウスら1998) (図1)に関する項目や、「靴下が白い」(144位: 2.24点)、「無地の下着を身につけている」(145位: 2.22点)、「靴下が無地である」(146位: 2.18点)、「白い下着を身につけている」(147位: 2.12点)など、学生の身だしなみに関する項目であった。

図1 ヘルス・コミュニケーションの概念図 (文献7より改変引用)



#### Ⅳ. 考察

学生が考える臨床実習における「好ましい行動」について検討した結果、学生は患者やセラピスト、病院職員への挨拶や実習に臨む態度、社会規範、患者に対する態度を重要視していることが明らかとなった。一方で、ヘルス・コミュニケーションや身だしなみは軽視している可能性が示された。

岩瀬ら(2013)は、臨床実習指導を経験したことがあるセラピスト(理学療法士、作業療法士、言語聴覚士)を対象に、実習指導者の視点からみた学生の「好感がもてる行動」について調査した結果、職種にかかわらず、実習指導者は学生の患者に対する態度を重要視していることを指摘している。本研究の結果、学生が考える「好ましい行動」の重要度が高かった項目は、「患者にはっきりと挨拶ができる」「セラピストにはっきりと挨拶ができる」「患者とコミュニケーションをとる努力をしている」「セラピストの治療場面を熱心に見学している」などの挨拶や実習に臨む態度であり、実習指導者が重要視する項目と一致していることが明らかとなった。

学生が考える「好ましい行動」の下位項目は、「患者との医療面接ができる」「他部門からの情報収集ができる」といったヘルス・コミュニケーションに関する項目や、「靴下が白い」「無地の下着を身につけている」「靴下が無地である」「白い下着を身につけている」など、学生の身だしなみに関する項目であった。患者との医療面接や他部門からの情報収集は、対象者の健康問題に関する情報を共有するための対象者と医療者、医療者と医療者との相互交流(ヘルス・コミュニケーション)である。理学療法にとって情報収集は、対象者が様々な社会(家庭、職場、地域社会)のなか

でどのように生活してきたかを知り、対象者を取り巻く環境のなかでどのように生活していくかを考えるうえで重要となる。また、医療面接の成否は、対象者の社会復帰のための評価、治療、介入を決定する最も重要なポイントとなる。そのため、セラピストには優れたコミュニケーション技法が求められる(奈良ら2006)。沖田ら(2002)は、理学療法士が臨床現場でどのようなコミュニケーション技術を使用しているのかを調査した結果、「治療の説明・指示」「患者教育」「ストレス対処」「社会的やり取り」「その他」のカテゴリが抽出されたと報告している。一方、小枝ら(2013)は、臨床実習における学生のコミュニケーションの特徴を検討した結果、1年次の臨床実習においてコミュニケーションが成立した要因として「話題」を挙げ、サブカテゴリとして「身近な話題」「学生の話」「対象者の興味のある話」「患者との共通の話題」などを報告している。また、コミュニケーション不成立の要因として「話題不足」を指摘している。本研究の結果、「患者にはっきりと挨拶ができる」「患者とコミュニケーションをとる努力をしている」「患者を理解しようと努力している」「患者を第一に考えることができる」「患者に笑顔で接することができる」が上位にあり、学生は患者とのコミュニケーションを重要視していることが伺える。これらのことから、学生はコミュニケーションを重要視しているが、医療面接や他部門からの情報収集といった理学療法士が重要視しているヘルス・コミュニケーション技術を修得していないため、ヘルス・コミュニケーションに関する項目が軽視されたのではないかと推察した。

なお、実習指導者を対象とした「臨床実習学生の好感がもてる行動」に関する報告(岩瀬ら2013)では、ヘルス・コミュニケーションに関する項目は、上位および下位20項目に位置していない。この点について、セラピストにとって患者との医療面接や他部門からの情報収集は、できて当然であるという認識があり、あまり重要視されなかったのかもしれない。

身だしなみについては、実習指導者を対象とした「臨床実習学生の好感がもてる行動」について調査した報告(岩瀬ら2013)においても下位項目に挙がっている。しかしながら、学生は身だしなみを整えて実習に臨むことが当然であるという指導者の認識があるのに対し、本研究の対象学生は、初めて実習着を着用するものが多く、下着や靴下の色にまでは配慮が行き届いていないため、下位項目になったと推察した。

これらの知見より、学生が考える臨床実習における「好ましい行動」が明らかとなった。すなわち、学生は患者やセラピスト、病院職員への挨拶や実習に臨む態度、社会規範、患者に対する態度を重要視していることが示唆された。一方で、ヘルス・コミュニケーションや身だしなみに関する事項は軽視されている可能性が示された。このことから、理学療法における対象者とのコミュニケーション技術は、身近な話題や対象者の興味のある話といった世間話のような広義のコミュニケーションではなく、医療の場における健康問題を巡る関係者の交流を表す“ヘルス・コミュニケーション”であることを指摘し、この視点から理学療法におけるコミュニケーション技術の学習支援の方向を具体化することが必要であると思われる。

ただし本研究は学生が考える臨床実習における「好ましい行動」を明らかにするための実践的な活動報告であり、本研究を一般化していくためには、アンケート結果の信頼性と妥当性を検討する必要がある。

#### 引用文献

- 岩瀬弘明, ら(2013)臨床実習学生の「好感がもてる行動」に関する意識調査 - 臨床実習指導者へのアンケート調査から - . 理学療法科学28(6): 印刷中 .
- 厚生労働省健康政策局(1999)理学療法士作業療法士養成施設指導要領 [http://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/shokan/kankeihourei/documents/yoryo_rigaku.pdf](http://kouseikyoku.mhlw.go.jp/kantoshinetsu/shokan/kankeihourei/documents/yoryo_rigaku.pdf) (閲覧日: 2013年10月21日)
- 小枝英輝, ら(2013)臨床実習における理学療法学生のコミュニケーション技術の特徴 - 理学療法専門学校における考察 - . 理学療法科学28(1): 7-14 .
- 内閣府(2013)平成25年版 高齢社会白書 . [http://www.8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/gaiyou/25_pdf_indexg.html](http://www.8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2013/gaiyou/25_pdf_indexg.html) (閲覧日: 2013年10月21日)
- 奈良勲, ら(2006)図解理学療法検査・測定ガイド . 東京, 文光堂, 592-596 .
- 日本理学療法士協会(2013a)理学療法士養成校一覧(平成25年度) . [http://www.japanpt.or.jp/02_about_pt/pdf/school.pdf](http://www.japanpt.or.jp/02_about_pt/pdf/school.pdf) (閲覧日: 2013年10月21日)
- 日本理学療法士協会(2013b)理学療法士国家試験合格者の推移 . [http://www.japanpt.or.jp/03_jpta/about_jpta/05_index.html](http://www.japanpt.or.jp/03_jpta/about_jpta/05_index.html) (閲覧日: 2013年10月21日)
- 沖田一彦, ら(2002)理学療法現場におけるコミュニケーション分析のすすめ . PTジャーナル36(9): 683-688 .
- ピーター・G・ノートハウス, ら(1998)ヘルス・コミュニケーション - これからの医療者の必須技術原著第2版 . 福岡, 九州大学出版会, 1-75 .
- 八木範彦, ら(1984)兵庫県下における臨床実習に関するアンケート調査 . 理学療法科学11(4): 211-214 .